

3、真実の世界

大学祭実行委員会発行の『伝言板』No.3に「いま、心の窓を開いてもう一度真実を見つめよう」という記載があったが、それは私の心をひいた。というのは、大衆化の進んだ現代社会では、その記事事実とは逆に、ややもすると、個人の個性や独創性は膨大な社会組織の中に埋没し、真実を語り合う友を失い、ただひとりわが世界をのみかたく守る独善的若者が多いからだ。

リースマンは、現代人を「孤独な群衆」と呼び、マルクーゼは「点の存在」と名づけているが、まこと現代社会の人間関係は孤独な点と点の関係であって不連続である。同じ教室に学ぶ学生が、例えば五十名いたとしても、個々の学生間に結びつきはなく、断絶した現象をよく目のあたりにする。短大時代の二年間、同じ坂道をのぼり、同じ教室で生活しなが



昭和53年 尾道取材旅行

ら、一度も語り合うことがないという現実、まことに寂しいではないか。

このとき、私達は心の窓を開いて真実を語り合おうとしている。学友会総務・大学祭実行委員会が掲げた大学祭統一テーマの *Face to Face* は、その副題が示しているように、胸襟を開いて真実を語り合おうというのである。見栄や外見にこだわることを捨てて内なるまごころにふれるとき、はじめて純粋な自己を表現できるのであるが、それはまた友の心に美しい共感を呼び起すことになる。そのためには、先づ自ずから我執を捨てて心の窓を開かねばならない。

隈もなく 澄める心の 輝けば

我が光とや 月思ふらむ

これは、月の歌人ともいわれる明恵の歌であるが、一点のくもりもなく澄みわたったまごころには、無心の月も感動するのである。ましてや人間においては尚更ではないか。心を開こう、そして語り合おう。さすればそこに真実の世界が展開するはずである。

第十五回大学祭パンフレット（昭56・10）